

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県病虫害防除所長

平成22年度病虫害発生予報第12号（3月）について

このことについて、病虫害発生予報第12号を発表したので送付します。

予報第12号

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	発生量		
		(現況)	(予想)	
		平年比	平年比	前年比
イチゴ	うどんこ病	やや少	やや少	少
	ハダニ類	並	並	並
ナス	すすかび病	少	やや少	少
	ミナミキイロアザミウマ	やや多	やや多	並
トマト	灰色かび病	並	並	並
キュウリ	べと病	少	少	並
	うどんこ病	やや多	並	並
野菜共通	コナジラミ類	やや少	並	並
茶	カンザワハダニ	やや少	やや少	やや少

* 茶の発生量(現況)は裾葉の発生量

<予想される向こう1か月の天候>

期間の前半は気温の変動が大きく、1週目の終わりから2週目は気温が低くなり、かなり低くなる場所があるでしょう。

天気は、数日の周期で変わるでしょう。

週別の気温は、1週目は、平年並または高く、2週目以降は、低いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	30	40	30
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

(福岡管区气象台 平成23年2月25日発表抜粋)

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【野菜】

1 イチゴうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-）。

発病株率 0.3%（平年 1.0%、前年 0.8%）

発病果率 0.0%（平年 0.2%、前年 0.2%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温、降水量とも平年並とされている（±）。

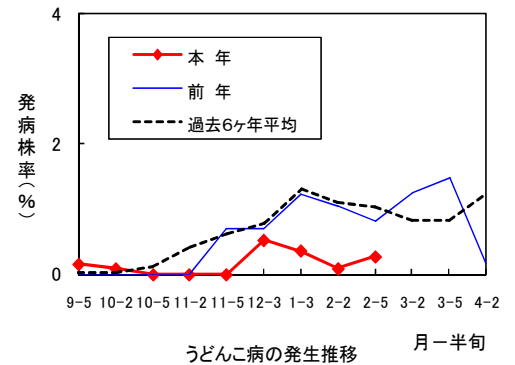
(3) 防除上の注意

ア 早期発見に努め、下葉かぎ後、薬剤が葉裏にもかかるよう丁寧に散布する。

イ ハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

ウ 発生後の防除は効果が低いので、発生前からの予防散布に努める。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 イチゴのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

寄生株率 14.7%（平年 14.7%、前年 10.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温、降水量とも平年並とされている（±）。

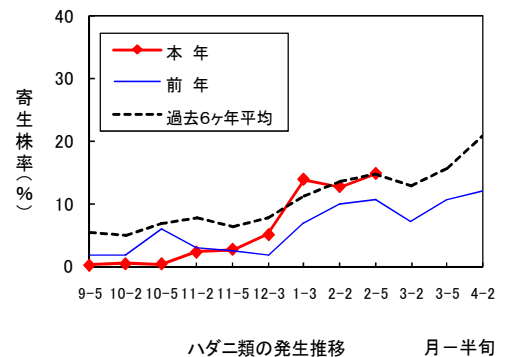
(3) 防除上の注意

ア 本種は、始めスポット的に発生し、地面に接した下位葉ほど寄生が多いので、葉かぎ等の管理作業時によく観察し、発生を認めたら早めに防除を行う。

イ 防除は摘葉後に行い、薬剤が葉裏にも十分にかかるよう散布する。

ウ 摘葉や除草した雑草は、ほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れ密閉して処分する。

エ カブリダニ類を放飼しているほ場では、影響の少ない薬剤を散布する。



3 ナスすすかび病

(1) 予報の内容

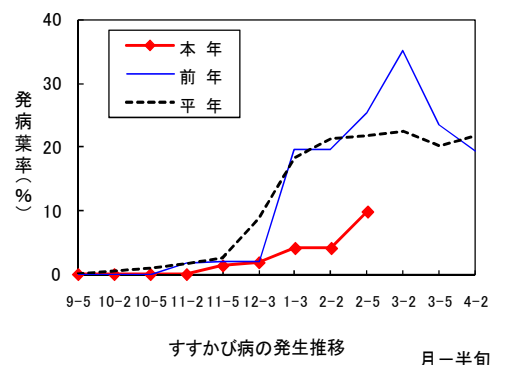
発生量：平年よりやや少・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

発病葉率 9.9%（平年 21.7%、前年 25.4%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年、降水量とも平年並とされている（±）。



(3) 防除上の注意

- ア 着果負担等で、樹勢が低下すると発生が多くなるので注意する。
- イ 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、発病初期のうちに防除を徹底する。
- ウ 発病葉はできるだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

4 ナスのミナミキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)。

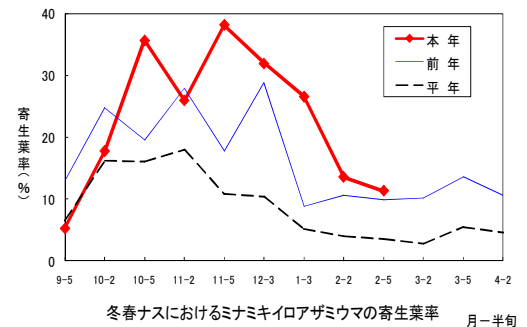
寄生葉率 11.4% (平年 3.6%、前年 9.9%)

被害果率 1.0% (平年 0.3%、前年 0.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温、降水量とも平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 葉裏の寄生が多いので、薬剤が葉裏にもかかるよう丁寧に散布する。
多発している場合は、約1週間後に再度薬剤散布を行う。
- イ ほ場内外の雑草を除去し、害虫の生息・増殖源を絶つ。
- ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



5 トマト灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

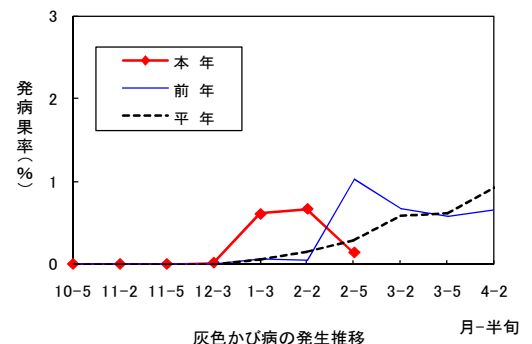
ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(+)

発病果率 0.1% (平年 0.3%、前年 1.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温、降水量とも平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 罹病葉、葉先枯れ、罹病果は見つけ次第処分する。
- イ ハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。
- ウ 開花後の萎れた花弁は、伝染源となるので取り除く。
- エ 農薬の散布は晴天の日中に行い、十分に換気して夕方密閉するまでに、薬液が乾くようにする。
- オ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



6 キュウリべと病

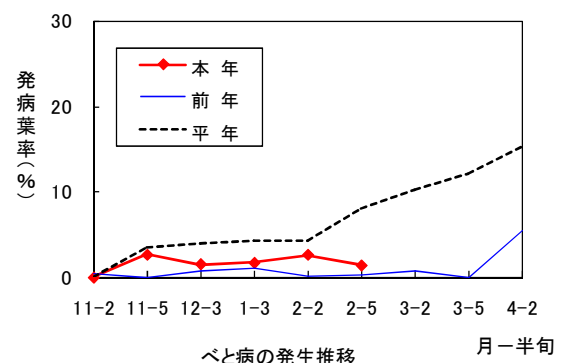
(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

発病葉率 1.4% (平年 8.0%、前年 0.2%)



イ 向こう1か月の気象予報では、気温、降水量とも平年並とされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 草勢が低下すると発病が助長されるので、適正な肥培管理を行う。

イ ハウスの換気を行い、多湿にならないよう管理する。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

7 キュウリうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（+）。

発病葉率 3.5%（平年 1.2%、前年 4.5%）

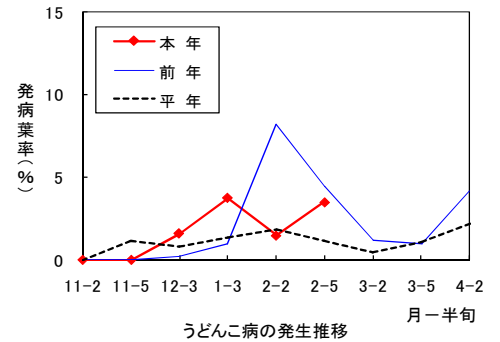
イ 向こう1か月の気象予報では、気温、降水量とも平年並とされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 罹病葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

イ ハウスの換気を行い、多湿にならないよう管理する。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



8 コナジラミ類（野菜共通）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-）。

ナス寄生葉率 3.0%（平年 8.0%、前年 20.0%）

トマト寄生葉率 1.4%（平年 1.7%、前年 0.2%）

キュウリ寄生葉率 0%（平年 0.3%、前年 0.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温、降水量とも平年並とされている（±）。

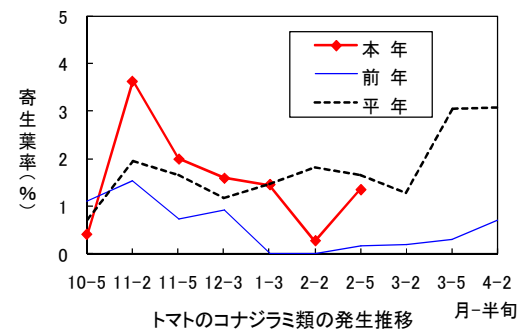
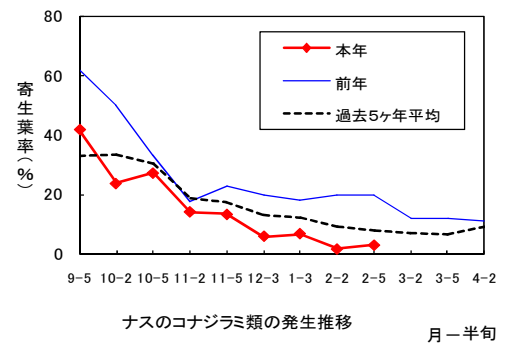
(3) 防除上の注意

ア タバココナジラミ類はトマト黄化葉巻病 (TYLCV) やキュウリ退緑黄化病 (CCYV) の媒介虫なので、早期発見に努め、防除を徹底する。

イ 幼虫や蛹が寄生している下位葉を除去し、施設内の密度を下げるとともに、葉裏の寄生が多いので、薬剤は葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ ほ場内外の雑草の除去を徹底する。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
イチゴ 灰色かび病	並	並	並	・罹病果は見つけ次第除去する。 また、下葉かぎを随時行い、株間の通風を図って湿度を低下させる。
ナス うどんこ病 灰色かび病	やや少 やや少	やや少 やや少	やや少 やや少	・罹病葉や罹病果実は見つけ次第除去し、 ほ場外へ持ち出し処分する。
トマト 葉かび病	少	少	少	・抵抗性品種を栽培しているほ場でも発生に注意し、すすかび病の防除も兼ねて予防散布を行う。
キュウリ 灰色かび病 褐斑病	やや少 やや少	やや少 やや少	やや少 やや少	・開花後の萎れた花卉に、灰色のかびを認めたら防除を開始する。 ・初期防除を徹底する。

【茶】

1 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生時期：平年よりやや遅

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 2月5半月調査の結果、裾葉における発生量は平年よりやや少なかった（－）。

<裾葉>

寄生葉率 2.0%（平年 3.8%、前年 4.1%）

50葉当たり寄生虫数 1.7頭（平年 6.1頭、前年 2.8頭）

発生ほ場率 50.0%（平年 56.8%、前年 77.8%）

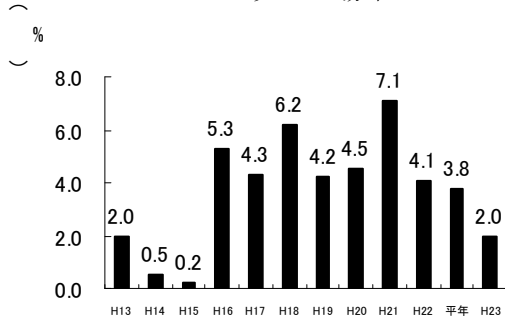


図1 寄生葉率

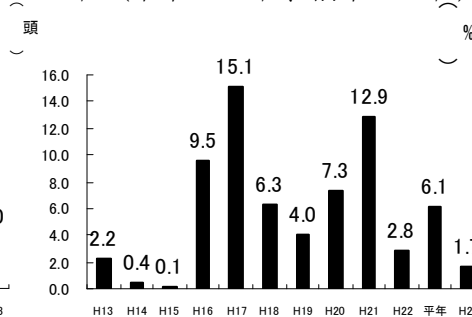


図2 50葉当たり寄生虫数

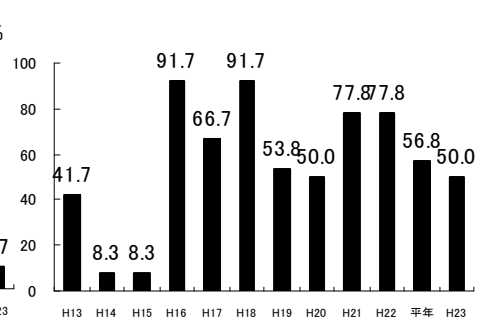


図3 発生ほ場率

イ 裾葉の越冬後第1世代孵化幼虫の発生は確認されず、現在のところ発生時期は平年より遅い（－）。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並で、今後発生量の増加および表層への移動が予想される（±）。

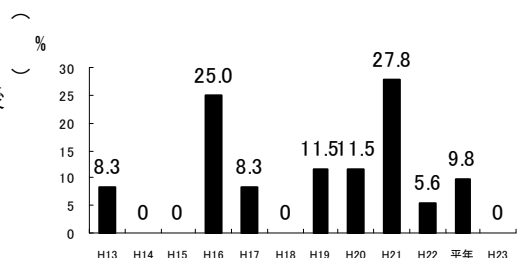


図4 裾葉の孵化幼虫の発生ほ場率

(3) 防除上の注意

- ア 裾葉を中心に発生状況をよく観察し、越冬成虫の寄生葉率が2%以上の場合は、成虫・幼虫・卵に効果の高い薬剤で、速やかに防除を行う。
- イ 春期の基本防除は孵化幼虫の発生初期をねらい、平坦地で3月3日～10日頃、山間地で3月10日～20日頃を目安に徹底する。
- ウ 薬剤は寄生の多い裾葉・葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。
- エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

- 適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などの※ラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

※適用作物を誤認して農薬を使用しないよう注意すること。

(例：① しゅんぎく と 食用ぎく、② トマト と ミニトマト、③ さといも と ずいき、

④ とうもろこし と ヤングコーン 等)。

2 飛散防止対策の徹底

- 風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。
- 飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。
- 散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

- 農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

- 噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

- 薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

- 空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除について
ホームページでお知らせしています。

ホームページ

<http://www.jpnp.ne.jp/fukuoka>

電子メール

kfok0301@sp.jpnp.ne.jp